どもりの男　　岡本　悠

たちばな、は、見損なった、殴るより、慣れろ

中学生時代の話

同じ野球部だった

たちばな、は、５番・ファースト

新太は、３番か６番・レフトだった

よく、一緒に、試合の日は、行った

俺が、外で待たされて

新太は、外に出たり、中に入ったり、

ウロチョロしながら

ようやく出発

笑わせるのが新太で

笑うのが、たちばな、という図式だった

車が来たとき、

自転車が２人並べばいのに

たちばな、が、並ばないで逆側に行こうとしたら

新太は、注意した

並んでいればいいだろう、と、

たちばな、は、ある日、新太の実家に泊まる際

たちばな、の、実家に電話した

「今日、新太君の家に泊まるから」

すると、新太は、ひやかした

「君は、いらね　えよ」

笑いが起こった

その日は、並んで寝た

寝る前は、２人でジョークを言い合う

「寝たか？」

「寝てない」

たちばな、は、すぐに、大爆笑した

後日、新太のお母さんから、たちばな、の、母に、電話が来た

新太のお母さんは

「こんなに、元気に笑っている子は、初めてですよ」

俺は、意外性を感じた

席替えがあった

たちばな、は、仲がいいと、うるさくなるから、席を離そうかと云った

新太は冷静に「それは、後悔するから、やめたほうがいい、近くでいい」と云った

新太は、流れを裏切った

国語の教師が、授業をしている際

たちばな、は、新太に、ちょっかい、をかけた

すると、新太は、「先生、たちばなが、ちょっかい、をかけてくるんですけど」

俺は、この教師とは、仲が悪かった

そもそも、先生に訴えるなんて、絶対なしだろ、と思ったら

肩透かしを食らった

俺は、注意だけだが、叱られた

俺は、食堂で、１人で、飯を食べていた

そしたら、新太が「なに、１人で食べてるんだよ、一緒に食おうぜ」と云った

野球の試合で、新太は、あわや、ホームランという、大飛球を放った

俺は、大声を出して、一人で興奮していた

結構、周りは冷めていた

三塁コーチャーズボックスまで走って、

「３つ、３つ」

と言って、声を張り上げた

その様子を、下級生が見ていた

冷やかす同級生もいたような気がする

バスで、一緒に帰る際

野球部の先輩が先にいた、

俺は、「先輩さようなら」と云った

先輩は、「たちばな君、さようなら」という言い方をした

新太は、無視された

俺は、新太の気持ちを慮った

なぜ、新太は、皆から嫌われるのだろう

俺は、本当に、まったくわからなかった

俺は、野球部で、ある男とも親しかったが

そこまで、楽しいとは思えなかった

やはり、腹の底から、笑えるのは新太だった

その日、その男と、新太の、どちらと帰るのか？

という、状態になった

最終的に俺は、また、新太の「後悔するぞ」という言葉に、

もっていかれた

新太を選んだ

その男は、「そんなことしてると、友達なくすよ」と云った

無論、今も友達はいないが、

俺は、新太を選んで良かったと、心から思っている

新太が、悩んでいた

俺もそうだが、男子校ということで、女の尺度がない

だから、自分が、どれくらいモテルのか、カッコイイのか、わからなかった

新太は、突然、「俺、この顔、絶対、モテねえよ」と云った

意外だった

修学旅行のグループ分けがあった

俺も、ハッキリしないところがあった

正直、どうでも良かったのだが、

新太と同じグループになればいいかな

と、思っていた

でも、流れで、一緒にならず

俺は、バスケットボール部の仲間に、おこぼれで入った

ある時期、新太の様子がおかしくなった

喋り方を気にしていた

俺は、普通に話しているような気がしたが

明らかに、何かを気にしていた

新太は、昔、小学生時代に

同級生に、どもり、の、子がいて、

真似をしていたらしい

それが、今になって浮上してしまったようだ

真似すると、うつる、らしい

関係あるかは、わからないが、ましてや、思春期だ

気になるだろう

ある日、俺は、教室のドアの前で

新太の喋り方のマネをしてしまった

新太は、突然、そんなに強くではないが

２発ほど、俺の頬を殴った

あとあと、それで、ハッキリした

この、どもり、で、悩んでいるんだと

国語の授業があった

明らかに何か裏があった

その先生と、新太の間に

国語の教師の「じゃあ、新太読んで」に、うさん臭さを感じた

猛特訓した跡がある

新太の読み方を聴いて、そう感じた

新太は、多分、そのことは、俺以外にはバレテいなかった

だから、万事、大丈夫だったで　いいのだが

まあ、俺には、バレテいただけだ

新太は、また、ある時期、誰とも話をしなくなった

サックスに夢中になっていたらしい

海辺で、１人で吹いていると聞いた

もちろん、俺とも話をしなかった

また、新太は、普通に、皆と喋り出した

俺が、高校を中退する最後の日

違うクラスにいた、新太と目が合った

「たちばな、ちょっと来いよ」

「たちばな、も、いよいよ辞めるのか」

その後、軽く会話した

新太から、じゃあ、そういうわけでな、と切り上げられて別れた

綺麗事のようだが、あの、どもり、を、克服したことが、新太に自信を植え付けたのではないかと、考えた、あれから、勉強も上位に行っていたし

あの時のパンチは本物だろう

俺も、嫌われ者だが、新太も嫌われ者だった、今は知らないが...

話し方には、注意しないといけないね

「完」